

あごら

MINI

〈22号〉

1978年11月10日発行 ¥100 円50

〈女と男〉のミニ雑誌〈あごらミニ〉 ●何でも言える
●何でも書ける ●小さな〈ひろば〉=AGORA・〈あごら〉
●あなたの声を待っています。みんなでつくる〈あごら〉

共通のテーマを求めて

三好 久美子

〈あごら九州〉が発足して一年十か月。その間、私たちはいったい何をして来たのか、月に一度集まるのはどうしてか、と考えてしまう。

当初の数は互いの想いを出し合うことで終わったが、その後は、どうしていいかわからないまま、本誌に添って生涯教育をテーマに進めていった。ところが、会員の誰かが現実を抱えていた問題ではないからか、どこからともなく「与えられたテーマ」という言葉が出はじめた。このテーマ設定への疑問を内に含んだまま数か月が過ぎてしまい、ようやくこの集まり自体について話し合いを始めたのは昨年末だった。

地に足のついた会にしたい、不満を発散させるだけで終わらせたくないなど、抽象的な意見はよく出るが、次回からどうするか具体的にとなると顔を見合わせるばかりだ。特に過敏になっていたテーマ設定については、皆の共通の問題をと考えるためか、一向に決まらない。少人数の割に年齢の幅も広く、環境も全く異なり、「女」ということで縛られている苦しさは一緒なのに、実際

の話になると違う点が目につくと言った具合で、共通のテーマなど見つけるのは不可能に思えた。

その時、KJ法のカードを使って各々の意識を図式化してみてもどうだろうと提案があった。方法に精通している者はいなかったが、一応次のようにしてみた。

まず、常々疑問に思ったり、気にかかっていることを何枚ものカードに自分のことばで書いて来る。それを読み上げながら共通するところのあるものをさがしてグループに分け、次に一枚ずつ補足説明をしてもらい、グループ内での関連を見てカードの配置を決める。さらに各グループの流れを考え、紙に貼ってコメントを付けたのが次ページの図である。

一枚のカードに込められた想いは深く大きく、また聞く人の心にも呼応し、質問や意見が続出して、三回（三か月）も費やしてしまった。図の良し悪しは別として、それまで人と自分の異なる点ばかり目についていたのが、似ているカードをさがし、関連を考えることで共通の部分がはるかに多いと実感できたし、自分の頭の中でもややもやしたまま堂々巡りしていた男女差別意識の問題が少しづつはつきりしてきて、今後の話し合いの発展に希望が持てるようになった。

二―四ページは、カードに基づいて私たちの意識の底にある「家庭の中の役割分担」を話し合った概要である。読者の意見・反論を待っている。

今月のなかみ

編集担当(あごら九州)

表紙のことは	共通のテーマを求めて	三好久美子 1
快談・怪談	男は仕事女は家庭 なぜ?	2
調査	子どもの目が見た働く母	5
参 加	福岡市主催の「婦人問題セミナー」に参加して 池田保子	6
男 の 声	「らしさ」について	後小路 久 6
訴 え る	子連れの母親が婦人会館から退室を促されて	
掲 示 板	読者からの連絡	7
お 知 ら せ	女のつとめ・女の講座	8
	〈あごら東海〉有志	7

〈あごら〉 19号

女にとつて 子どもとは

「女・子ども」と、とかく女と子どもはひとくくりにされがちですが、女にとつて子どもとは何でしょう。つくられた「母性」を考え直しつつ、女の生きる道をまた一つ提案してみます。

〔論文〕 ●日本近代の国家と母性 中嶋 邦 ●家族社会学と母子関係 酒井はるみ

●現代日本の子殺しにみる母の孤立 佐々木宏子 ●反母性論 国沢静子

〔インタビュー〕 小室加代子 VS 鎮目恭夫

〔随想〕 舟木恵美ほか

〔ティーチン〕 日本の女性解放運動をどう展開するか

〔その2〕 田中寿美子ほか

〔紹介〕 八〇年国際婦人会議に向けてほか

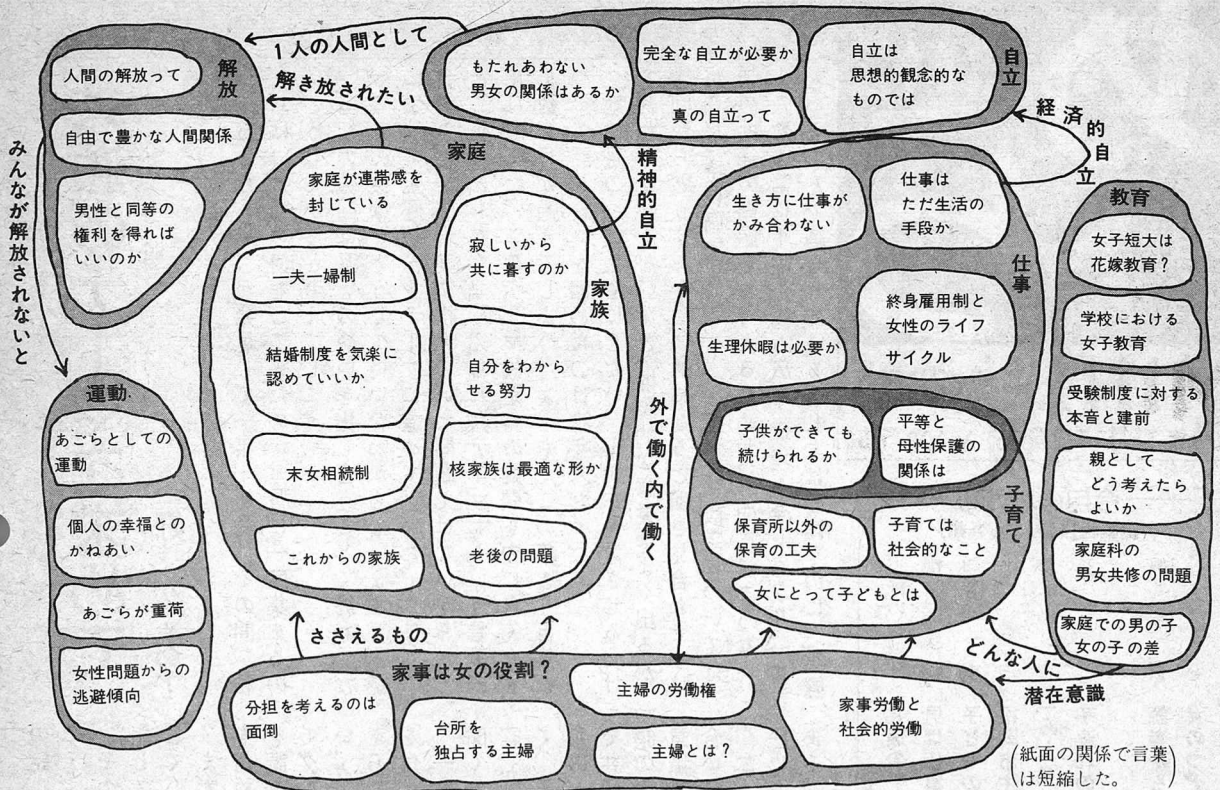
〔窓〕 女性団体大連合の動きほか

〔資料〕 出産白書ほか

あごら編集部編

A 5 232頁 800円

BOC出版部



男は仕事 女は家庭 なぜ?

♥わが家
では

A 「男女の役割分担」というテーマで話しあう場合、ひとりひとりの背景なり、立場、経験が違ってくるから、役割分担を許せる範囲もおのずと違ってくるのではない。例えば母親という立場を優先に考えて、ある程度肯定的に考える人や、仕事本位の立場で否定的に考える人等々。だから、まず手はじめに家族の中の役割分担から考えたい。

B 仕事から帰るや家庭では自分ひとりきりさきりまいをしているように疑問を感じる。ことがたびたび。でもその疑問を家族にぶつけてみたことはない。職場でも「男だから」「女だから」という言葉がよく使われている。役割分担という言葉で「自分の位置」という言葉におきかえて考えてみようかな、と思っている。

C 私は共働きだが、家事は夫と妻が半分ずつ受け持つのが当然ではないか、どうして妻だけがやらねばならないのか、夫はそんなことを考えてみる必要があるのだろうか、という疑問がつのるばかり。ところが、正面切って話し合うチャンス

はあっても、なかなか言い出せなくて、私自身、逃げていた。波風を立てたくないという気持ち。こちらから問題を持ち出して、逆にガチャガチャ言われるより、黙って家事を続けるしかなくて。

D 私は家事をきらいだから高校まではしたことがなかった。でも母がひとりですべての話を聞いて疑問だけは感じていた。いま男性と共同生活をしてみて、生活のなかから男女の役割分担と差別の問題を考えている。現在家事は、できる方がやろうということにしているけど、何となく時間のある自分の方が多く家事をしている。でも、それを当然だと思わせたくないと思う。

C そう。家事を折半してやるのが望みじゃなくて、本来ひとりひとりが自分に関する家事を自分でするのが当然だという意識を相手にもってもらいたい。

でも、たまたま夫が家事をしてくれたときなんか、悪いなあという気持ちが先立って。自分がこんな意識だから相手に望むのは無理かなあと思ってしまう。

A 私も学校に通っているころは「手伝うよりは、その分勉強しなさい」と母に言われてほとんどしたことがなかった。だから家事を要求されずに育った男性なら苦になるのは当然だろうし、子どもの時から皆家事に慣れていたなら、男も女ももっと自然にやるのではないかしら。

B わが家でも、私が山に登ったりよく家をあけるので、男の子が「お母さんはふつうの主婦とは違うね」という。でも、子どもは犠牲になっているかもしれないが、そういうことで男女の役割分担

(紙面の関係で言葉は短縮した。)

について考えてきているのだと思う。だから、これからの私のやりたいことは、どんどんやっていこうと思っている。

E 私のところでも、「女の問題」に全然関心のないように見える女の子でも、時々、父親にむかってずばりと「家事を手伝ったら」なんて言っているのを見ると、やはり、こちらの心の動きを子どもはみて感じているのだなと思う。

♥男の優越感

A このあいだ、ある資料に載っていたアンケートで「妻の働くことについてどう思うか」という問に対して、その答がすべて制限つきで「……なら許す」とか「……ならば許さない」となっているわけ。許すという言葉に、妻に対する夫の優越意識があまりに露骨で……。

C 妻が働いていて、家事も双方うまく分担している。夫に、働かせてやっているとか、協力してやっているという意識があるかぎり、現象がどう協力的に映ろうとも、男女の関係に上下や主従の関係をみているのと同じような気がする。

A 家族は愛情で結ばれていてほしいのに。これから新しく自分たちが築こうとする家族だったら希望ももてるけど、現実には毎日暮らしている家族を考えると、変えること、動かすことはとてもむずかしい。それに、年よりや身障者がかえる問題が家族の中にからむときには、ただ考えこんでしまう。

F 結婚してふたりきりで暮らしているときは、かなり協力しあって家事も仕事

もやりとげていたが、子どもが生まれたとたん、育児の問題だけはあいている方がやるというわけにはいかず、以来生活が変わってしまった。もともと家族というのは性を媒体として、経済・居住・愛情で結ばれた家族構成員の相互作用の体系から役割がおのずからできあがっているのだと思う。話しあった上の役割分担ではなく、なしくずし的にそうなるというのが今までの日本の家族ではないかと思う。お互いの話し合いや理解を前提としていかなければ「愛情があればどうこう」というふうに流されてしまうと思う。

E 「毎日新聞」で紹介された「あごら九州」の記事を見たとき十五才の少女から手紙をいただいて感動した。その中で「男性は女性に対して優越感をもっている。女性も男性に対して劣等感を持っている。これは一体なぜだろう」という疑問から実に真剣にそのことを問いつめようとしているのに打たれた。その点男性の側からの発言を。

G 学生時代には、むしろ女性に対して劣等感を抱いていたくらいだったのに、世の中に出てからは女性の欠点が目について、私個人についていえば育てられる過程というよりは、社会に出てから女性に対して優越感をもつようになった。

D 女だからたよりないとか、気まぐれだとか思うのか。

G 女性の欠点は子どもの性質と同じで、自分の我執にかかわるところにしか興味をもたず、それ以外に対しては消極的になるようだ。

出席者

- | | |
|---|--------|
| A | 女 会社社員 |
| B | 女 大学職員 |
| C | 女 会社社員 |
| D | 女 学生 |
| E | 女 主婦 |
| F | 女 主婦 |
| G | 男 会社社員 |
| H | 女 主婦 |
| I | 女 看護学生 |

A たまたま出会った女性がそうであつたからといって本質的に女は子どもと同じと思うのはね……。

C 女性の欠点をみると、そうなった社会的背景を考えたらどうか。会社で雑用ばかりさせておいて能力がないという決めつけがおかしい。

A 男の子を育てるときは社会に出ることを頭において育てるし、女の子はこれまでそういう育てられ方をしていないのだから。

♥男の子を育てるときは

H 私の長男は家に人の手があつたせいもあって、横のものをタテにもせず、殿様のように暮らしていた。それが結婚したトタン百八十度人が変わってしまった。結婚相手が、自分はズツと働き続けたい、ということと、以来息子は、家事はよく協力するし、通勤の時も、生まれて間もない赤ん坊を自分で抱いて電車に乗ってゆく。あんまりの変わりように、シヨツクやら情けないやら（笑）。

私にも姑根性があったのか、と後でふりかえって驚いたくらい。でも今では、息子のためにも、仕事を持って働くハツラツとした妻をもって、かえっていいのではないかと思っている。自分の息子のことから、最近の若い人はそんなものかと思っていたのだが……。

A 必ずしもそうじゃない。会社の男の子で若いのに早々と結婚するのは、何ても自分のためにしてもらえて、便利だからというのが多い。

B だから親元を離れて大学へゆき、卒業したら、すぐ結婚という例も多い。

H まったく勝手なもので、息子の親としては、結婚したら、もっと泰然として欲しいと思ったりするが、逆に娘さんを持つ親の立場からは、娘をだいいじにしてくれ、協力もしてほしいと思っているようだ。まったくエゴなのだけれど。

B 私も今まで息子二人には何もさせていなくて少々手おくれの感もあるが、今の水不足の事態を利用して、水貯めの仕事とお風呂の水くみを子どもの日課にした。「家族の一員である以上家のこともしなけりやあいないでしよう」といつて。私はもともと仕事が好きで会社勤めをしていたが、結婚して子どもができたのでやめ、約十年子育てで仕事をしなくてもできなかった。でも、だんだん仕事をしたくて、自分でもノイローゼじゃないかと思うほど、家にいることがむずかしくて。やっと今の病院で働きだして、仕事そのものは生きがいという性質のものではないけれど、自分なりにいきいきと暮らし、社会に出ても対等に仕事ができ

る喜びを感じている。でもいったん家に帰れば「女が家事をするのは当たり前」というのが待ちかまえていて……。それでも微々たるものとはいえ、少しずつ理解が増してきていると思う。

H しかし世の男性は理解だけではしても直接手を貸すよりはしない方がいいから逃げていんだと思う。男性ってズルイから、協力することが習慣になるのがこわいんだと思う。

E それは男性に限らず、子どもだって勉強を口実になかなか家事を手伝わない。C 自分も親元にいるころはできるだけ家事はしたくなくて逃げていた。今ごろになって、家事が自分ひとりの肩にかぶさって「自分のことは自分で」などと言っているんだから(笑)。

G でも男だって女だってやらなくてはならない必然性が生じればやる。ボクも自炊をしているが、好んでやりたくはないけど、そうかといって引きかえに結婚したいという発想はおこらない(笑)。

♥男だつて

解放されてない

E 男の人のほうが自己表現の場として仕事に打ち込んでいる場合が多いのでは。

G そんな人はごく一部で、大半はイヤでも仕方なく仕事している。

E 男の職業意識をささえるものは「妻子を養わなくては」というのもあるのではないだろうか。

G 日本の男性の場合は仕事に忙しくて疲れ果てて家庭に帰るといふ人が多い。

女だけが解放されていないと考えるのはおかしいんで、男だってちっとも解放なんかされていないと思う。

A 男ひとりの収入で暮らすとするから、特に若い世帯もちだに残業でやっと生活を成り立たせている。妻も働けば収入の面で足らなくなり、お互いに無理しないでもすむはずなのに、男のこけんにかかわるとかて妻を家庭に閉じこめている。女性の側も、仕事の面では給料は多いほうがいいが責任の重いのはイヤ、結婚したらアクセク働くよりは夫の給料で趣味やサークルで生きがいをつけた、という人が私のまわりにもたくさんいる。

♥女自身が動かなきや

E Iさんが看護学校に通いだしたのはどういう動機から?

I 高校卒業後三年ほど企業に勤めていたが、新卒でも十年働いている人でも、仕事の内容は変わらない。もともと大学に行きたくて働いていたので、それがダメになったとき会社もやめて、その後アルバイトで生活してきた。いろんな仕事をしていたが、長く続けられる仕事をしたかったとき、それは五種類くらいしかない。そのひとつとして看護婦を選んだ。

A 確かに女性の職種は男性に比べて少ない。でも職域を広げてゆくのは女性である自分自身しかない。私も、もっと他に自分の能力に適した分野があるので、今では、男性だって皆、才能や好みにあった仕事をしているわけではないのに、そ

れぞれがんばっている。私自身もっと勉強して、会社内で男性の仕事とされているものに挑戦して、自分の手で職域を広げるしかないと考えようになった。

C さんの場合でも最初、とにかく電算機の会社に入れてもらえさえすれば、と言って入社しながら、ずうずうしくも今ではシステムエンジニアの仕事までしている(笑)。その辺のずうずうしさが大切だと思つて。

F いま、図々しいという話が出たけど、仕事を女性が続けていくとき確かにそれがないと。文句も言うけど仕事もする、という女性が結局仕事を続けている。

G 企業目的は儲けることしかないんだから、仕事ができるなら男でも女でもどっちでもいいわけで、これからもっと女性も進出してくると思う。しかし肝心かなめの所を男が握っている以上、働く女性の比率がふえても社会の構造を変えられないのではないか。

H でも、一般の男の人は社会変革に対して無気力で保守的な人が多い。先だつての文学伝習所にしても女性が圧倒的に多かった。女性のほうが今の世の中のことをマジメに考えているのではないか。

A 先日的小郡市(福岡県)のリコール運動を成功させたのは、ひとえに女性のきまじめさだという評価を大切にしたい。

黒沼ユリ子・リサイタルへどうぞ

11・11 福岡山 11・17 愛媛 11・18 京都

11・20 神戸 11・22 別府 11・23 大阪

11・24 姫路 11・26 加古川 11・28 日

11・12・2 鶴岡 12・6 東京・石橋メ

モリアルホール 12・11 伊勢 12・20 仙台

ふり返つて

三回分の例会をまとめたのが、上記の対談である。そのため内容はバラつきが多分にある。そして回を追うごとに内容が充実——となっていないのが、私たちの反省点である。

例会のもち方をめぐって手ざぐりて始めたカード方式だった。紙面の都合上、カードの中味はごく簡略化しているが、実際にはもつと生の言葉を用い、各自がもつ疑問や問題を一つ一つカードに現わした。そのカードが皆の討論によつて整理され、図式化されていったときは、大きな手がかりを得たように思えた。

ところが実際にそれに基づいて「男女の役割分担」というテーマに取り組んでみると、回を重ねても、積み重ねが感じられない。また、こうしてまとめてみると、それぞれのつっこみや展開が足りず、言いつばなし、聞きつばなしになつていくところかなり目につく。

それはいったいなぜか、と皆で考えてみたが、結局、準備及び勉強不足が原因ではないか、ということになった。最近「男女の役割分担論」というのは雑誌でもよくとりあげられるし、本も多く出版されている。それにあたなるなり、誰かレポーターを勤めるなりして、もつと系統的に勉強すべきではなかったか。

こんな反省をふまえ、このカード方式を、新しい参加者を含め、もう一度検討したいと考えている。

調査

子どもの目 が見た はたらく母



河原まほ

「お母さんが働きに出て家にいないけれど、淋しいやない？」働く母親をもつ子どもへの問いかけはたいていこうだ。お母さんは家にいるものとの前提に、たずねられる子どもは戸惑い、ためらう。

「働く母親」を大人側から語られることは多い。だが子ども自身から言うことは少ない。

「子どもの目」を通して「働く母親」をどうとらえているか、「働く母親」を考える一つの手がかりになればと思い、次の様なことを子ども自身、また母親を通じて子どもに、たずねてみた。

「調査」———というには素朴だが、子どもの微妙な感情のユレには気を使って、「お母さんが働いていることをどう思う？」と質問した。

* * *

6歳男 母親が少し遅れて出かける時は、「きょう、お休み？」と聞く。

11歳女 洋服など買ってあげるといって、勤めていない時と余り変わらない。疲れているから手伝いさないとか、忙しさから母親がヒステリックになる

ので勤めてはしくない。

12歳男 お金もふえるし、生活が豊になるから働いてよい。

14歳男 登校時も帰った時も、母がいるので別に関係ない。

6歳女 帰って来た時、誰もいないので淋しい、勉強する時そばにいてくれる人がいないので家にいてほしい。

5歳男 お母さんにお友達が多くなるから働きに出てよい。

13歳男 帰って来た時、カギを自分であけるのが余りよくないが、勤めには出てよい。

15歳男 母親たちが井戸端会議の集まりをしているよりはずっと賢明だ。家庭を破壊しない程度だったら賛成。

8歳女 淋しいとは思わない。うるさくなくてよっぽどいい（一人っ子）。

10歳女 お勤めに出て、いろんな物を買ってくれるからそのほうがいい。姉弟のいないことも平気。

8歳男 家にいたほうがいいけど、張り切っているお母さんを見ると、別に何でもない。疲れているなと思う。

11歳男 淋しいと思う暇もない。塾に行ったり、剣道のおけいこもあるし。

14歳男 勤めに出るようになって口やかましくなった。だけど解放された思いで、はつとする面もある。家にくすぶっている母親よりはいいだろう。

14歳女 ちょっと淋しいと思う時もあるし、家について欲しい。でも別にかわらない。

18歳女 母は専業主婦には向いていない人だし、視野を広げる意味でも賛成。

その分手助けすることは好ましいことではないけれど。

41歳女 私の母は、戦後、生活のために事務員として就業した。母が仕事をもらったことで経済的な心配はなくなり、のんびりとした生活することができたと思う。そのせいか、まわりの人たちから明るくおやかだとの声をよくきいて育った。今にして思えば、このようなおおらかさは、母が決してグチをこぼさず、苦勞は自分の胸の中にという結果にはかならないと思う。このようないことがよかつたか悪かつたかはわからないが、昔の女の生き方の一つであつたと思う。

今の時代のように、自己の確立とか解放とか意志的なたちで母が就業したわけではないので、学校から帰り、夕食の仕度をするのは当たり前のことであつた。私が学生時代にバイトをしたのも、卒業後仕事をもつたのも、生きるためには当たり前のことであり、女だから男だからという以前に、人間として選んだ道だつたと思う。現在もお、生活の主体は亭主であつても、私は働き続けていくと思う。そして、私の潜在意識の中に、私自身が生きてる部分が仕事をもっているということにあるのだからということは、十分に察しられる。

13歳男 良かったとも、悪かったとも感じない。現在お母さんにして欲しい事は、お小使いをふやして欲しい。家事はお父さんも僕もする。僕は将来奥さんに共稼ぎはさせない。（母は生命保険。

父は会社員。妹は小学生）

8歳女 働いているお母さんが好き。市場や買物に一緒に行ったり、縫物をしてくれると嬉しい。家の手伝いはお父さんも私もしない。大きくなつたらお母さんと同じ仕事をしたい。（母は美容師。父は美容器具販売。一人っ子）。

12歳男 お父さん役とお母さん役の両方とても大へんだらうと思う。現在のお母さんは忙し過ぎるので休ませてあげたい。僕も家事が追いつかないほど忙しい。お母さんのために早く大きくなりたい。（母は保育園）。

* * *

たずねた後の反省として、次の様な項目も聞いた方が良かったのではと思った。

(1)お母さんの職業をどう思うか。(2)父、本人も家事を手伝うか。(3)将来働き続けたいか。男子には、働く妻がいいか。

(4)お母さんの言葉で好きな言葉、嫌いな言葉。そして家族構成も付記し、質問方法も一律にした方が良かった。（ご協力ありがとうございました）。

日本にも男女雇用平等法を！

女たちの大決起集会と

デモンストレーション

期日 一九七九年一月二十日 午後

場所 渋谷山手教会

連絡先 新宿区加賀町2-13

「わいふ」編集部内「わたしたちの男女雇用平等法をつくる会」

電話 (352) 7010

(260) 4771

福岡市主催の

「婦人問題セミナー」
に参加して

へあこら九州の例会会場として、毎回收利用している福岡市立婦人会館で「婦人問題セミナー」が開催されるとのこと、あこら会員から一人が参加しました。

九月二十三日から十回、隔週水曜日夕方、対象は勤労婦人、講師はすべて女性で大学教授や弁護士です。セミナーを通して市側の姿勢を探る興味もあり、現在までに三回目を終えました。会館側の若いOLが多いかという予想を裏切って、年齢層が幅広く、共働きの人や子ども連れの女性もかなりいる様子に、講師も戸惑いを見せていました。小さな集まりしか知らない私には、百人もの女性の熱い瞳は一種の感動です。また、各々に問題を取り組んできた姿勢がうかがえて、とかくへあこら九州の例会参加のみで自分をこまかしている私には、刺激的です。「婦人運動史」「婦人問題の現状」の講演を聞いた今までは、時間の制約で中途半端に終わるのと、参加者間の討論がないのが不満として残りますが、それは自分自身の受身な態度を責め、かつ今後を期待することにします。女性であるがゆえに社会生活をしていく過程でさまざまな障害につきあたり、それに負けじと取り組むおんなたちのこの出会いの場に、へあこら九州でもよく口にする「連帯」が、果たしてどんな形で存在するのだろうかとも思っています。(池田 保子)

男の声

「らしさ」について

後小路 久

らしさという言葉を使えば私たちはよく耳にし、またよく使用もしているわけですが、私としては、その使用の仕方に抵抗感と不思議さの混じった、何だか複雑なものを感じます。このように感じる者は私だけではないだろうと思うのですがいかがでしょうか。らしさとは非常に幅の広い意味を含んでしまう性質を持っているように思えます。その結果、問題が不明確となり、本質を見失うことになってしまふのではないかと。「らしさ」には、本物に近づくということも含まれるのですが、本物なのだというだけではありません。この似て非なる「らしさ」のために、最も本質的なものへの認識を阻害するのではないかと考えています。そのように考えて「らしさ」というものを考えてみると、非常に観念的で感覚的な用法が氾濫しているようです。そのことは私たちが本物へと近づけないための精神的拘束なのではないかと不安になるのです。

男らしさ(その一)

男と女(女と男)の違いに関する現状のモラル・境遇条件等を肯定しようとすると、私は迷う気持ちが自分の中にある

ることを感じます。私たちは今ある状況を受け入れてほんとうに十分なのだろうかという疑問です。なぜかという、現在、あたかも完全に不動であるかのように見える事柄でも、ほんの少し前の時代のことを思い出してみると、今は大きくかはなれていることがわかります。例としては、女と男が一諸に生活すること(一般的には結婚と言っています)を考えてみたのですが、一世代前(私たちの親が若者だった頃)までは相手の顔もろくに見ることもなく、せいぜい見たとしても、相手の座っている膝のあたりか、もしくは手の先ぐらいいを見るのが関の山といったところだったろうと思います。これでは幸運に手の先を見たといっても、えらくこの人は色の黒い手をしているなあといったことぐらいいしか理解できなかったろうと思われれます。もちろん中には勇氣ある人もいたわけですが、そのような人は少数でした。つまり大勢としては前記のような状況であつたわけです。しかし現在では相手の顔かたちの好き嫌いから、収入等々までを知ることがあたりまえです。これは若い人たちだけのことでなく、相手の膝のあたりを見て一諸に生活をするようになった親たちでさえ、自分の好きな人の一人や二人見つけられないようでは駄目だよと言いつくすくらいです。この驚くべき変化は、絶対と思われていたことが絶対でなくなり、その絶対でなくなったことが絶対になつてしまつていくことを意味します。私は、この変化は、個人の自由、個人の権利の拡大の方向に向いているというこ

とだと思えます。もちろんこのような変化というものは放置されたなかで発生したということではなく、個々の女や男が少しずつ行爲した結果です。そしてその行爲も初めは少数であつたのが増加し、そのトータル量が拡大した結果、大きな変化が起きたわけですね。このように現在というものを一つの例で考えてみると、現在というものは止まっているのではなくて動いているということ、そしてその動く方向は、前記のように人権の拡大の方向になるということです。となれば、今後現在が百点でないということならば百点に近づき続けるための、そして百点になるための変化をしていくわけですね。もし今が百点で以後不変であるという人がいれば、その人は現在の種々の矛盾、とくにここで言っている女と男の間の矛盾に對してどのように答を用意するのか、また現在少数でも現状に不満をもつ女と男に對して、合理的で科学的な答をどのように用意できるのかということになると思います。私はその答は観念的なものならば可能だと思えますが、それでは不十分であると思えます。そのようなわけで私としては今ある「らしさ」というレールには乗りえないわけですね。それでは本物の女と男とは何だということになると非常に困難な問題ですが、しかしここで女と男が協力してその道を捜すならば必ずや見つけることができると思えます。そのようなわけで私としては女と男を研究し本当の男(人間)になりたいと思ひへあこらに参加させてもらっているわけです。

子連れの母親が

婦人会館から退室を促されて

十月七日(土)午前十時半より、名古屋市婦人会館主催の「婦人問題とその学習」という懇談会の案内が「あごら東海」にも来ました。対象は「婦人の学習団体・グループのリーダーおよびこれからリーダーとして活動しようとする方々」とあったので「あごら」代表として二児の母親である一会員(30歳)が出席することになりました。かの女は、婦人問題に大変関心があり、講師の神田道子氏の話も聞き、懇談会の席でただ自分の意見を出せるか試すこともできると言っていました。が、案内状には託児のことがふれてなかったのに「あごら」の例会にはいつも連れて来ている子どもを、この時どうしようかと迷って、会館側に尋ねましたが、当日、託児はないという返事でした。託児の用意がないということは、

連れて行ってもいいと解釈し、上の子は近所の人に頼み、二歳の子は、おもちやと弁当を持たせ、連れて出席しました。ところが、会が始まって四十分ほどたった頃、子どもが「おしっこ」と言ったので席を立ち、再び部屋に入ろうとしたら、副館長より、子どもを連れての入場は、遠慮してほしいという内容の声がかかりました。

「大切な話なので、テープをとっている人の邪魔になると、後で会館側が苦情を受けることになる」というのが、その理由でした。子どもは時々、母親に話しかけましたが、進行を防げるほどではないと思っていたかの女は、とても残念でした。もし、見解の相違で、その子が気になつて話もできないと感じた人があつたとしても、婦人問題というのは、これも

「顔の秘密」——について本を出しました。

左右の目の大きさが違う人、三日目のようにアゴのしゃくれた人、顔が示す性格や行動を読みとる本をまとめました。毎日、たくさんの人の悩みを聞き、それに答える本を出せたら……と思つたのです。新書版二〇〇ページ五九〇円ですが、「あごら」関係の方には五〇〇円(送料一〇〇円)でお頒ちします。東京運命学研究会 横玉淑

◆主婦の作文を募集中

生活実感のにじみ出た暮らし方、生き方など、人生を前向きにとらえた内容のものを四百字三枚半にまとめて下記にお送りください。千四六〇 名古屋市中町栄2丁目9の30栄山吉ビル 日本健康生活研究会「月刊みどりの広場」編集部 謝礼は一篇一万五百円です。

問題提起と考え、この地点から子どもをひつくるめて考えてもいいのではないかと思います。

この一件について、「あごら」内部でも検討を重ねて来ました。まず、若いリーダー養成のための懇談会とうたうなら、当然、幼い子をもつ母親も出席するだろうに、託児の用意がなかったこと。また、何らかの都合で託児が間に合わなかったとして、どうして、前記のような理由で再入場を防げられなければならないのかということが、疑問として残りました。それで、本人を含む会員四人で、副館長に会見を申し入れ、十月十二日(火)に話し合いをしました。

副館長は、母親に退場を促したことにについては肯定的であり、準備期間が短かく急であつたため、企画に無理があつた点のみを認められました。託児については、こちらの要望を今後の参考にするという程度に留まりました。子育て中の若い母親の学習より、子育てを終えた年齢の方への迷惑を気にしておられるようでした。当グループとしては、子育てを含めて、若い母親の学習権に、もっと温かい配慮をいただきたいと、ただひたすらお願いする以外に力がありませんでした。各サークル・団体で、子育て中の母親が外では学べないのかということを中心に、ぜひ話し合い、私どもの指針となるご意見をお聞かせください。

「あごら東海」

伊藤汎美 石川由紀 奥村和子
合田京子 桜井京子 高橋ますみ
山下智恵子

婦人民主クラブ歴史講座 卑弥呼からウーマン・リブまで (後期)

—日本史の中の女性—

11月25日	家を支えた女—貞婦・孝女と女工たち	大浜徹也	3月24日	働く女たちの系譜— 1930年代を中心に(1)	山代 巴
12月16日	自我のめざめ—葉・品子・らいてう	山本藤枝	4月28日	働く女たちの系譜— (2)	山代 巴
1月27日	女子教育と婦人雑誌—良妻賢母と主婦の系譜	樋口恵子	5月26日	植民地と女	森崎和江
2月24日	爆弾を抱く女たち—菅野須賀子・金子文子	瀬戸内晴美	6月23日	戦争と女—ファシズムの嵐の中で	吉見周子
			7月28日	近代100年を通して	もろさわようこ

ところ 千駄ヶ谷区民会館 (会場変更の場合あり)

会費 13回通し券 8,000円 1回 700円

婦人民主クラブ 東京都渋谷区神宮前3-31-18 電話 (402) 3244

〈女のつどい・女の講座〉

日	時	テ	マ	会	場
11月10日(金)	18:30~21:00	あごら20号編集会議		あごら読書室	03-354-9014
12日(日)	13:30~16:00	「あごらミニ第三回編集会議」〈あごら京都〉		京都市上京区YWCA	
13日(月)	19:30~	例会〈あごら武蔵野〉		東村山社会福祉センター	
	18:30~	労働分科会〈行動する会〉		中島法律事務所	03-350-6082
15日(水)	18:30~21:00	78第2期女大生「反戦を貫いた女性——長谷川テルを中心に——」沢地久枝〈アジアの女たちの会〉		渋谷勤労福祉会館	03-462-2511
18日(土)	14:00~17:00	「わたしの生涯教育」〈あごら神奈川〉		横浜勤労者会館	045-681-1031
	18:00~21:00	黒坂正文のなんじゃもんじゃミニコンサート〈わたしのなかのわたしたち——女性の文化を創造するとしま会準備会——〉		千早社会教育会館	03-974-1335
	13:30~16:30	「大学生と共修運動——各大学男女学生の意見を聞く」〈家庭科共修の会〉		婦選会館	
	14:00~16:00	「霊友会と女性」ヘレン・ハードニーカー〈女性学研究会〉		井手祥子宅	03-983-6764
19日(日)	13:00~16:30	結婚の意味を問う継続討論〈藤村 哲〉		豊島振興会館小会議室	
	13:30~16:00	「あごらミニ第四回編集会議」〈あごら京都〉		京都市上京区YWCA	
	18:00~	第6回学習会〈鉄道の七人と共に性による仕事差別・賃金差別と闘う会〉		渋谷勤労福祉会館	
21日(火)	13:30~16:30	社会福祉市民講座「家庭とは——自立のすすめ」丸岡秀子〈泉の会・東京都民生局〉		セブンシティ(年金基金センター)	03-376-5101
24日(金)	18:00~	「結婚について考える」〈あごら北東京〉		婦人協同法律事務所	03-985-3308
	18:30~	教育分科会「教科書チェックについて」〈行動する会〉		中島法律事務所	
	19:00~21:00	連続講座「宮本百合子の世界」駒尺喜美〈ひかりぐるま&まいにち大工〉		すぺーすJORA	03-203-6022
25日(土)	14:00~	例会〈あごら九州〉		福岡市婦人会館	092-712-2662
	14:00~16:00	婦人民主クラブ歴史講座「家を支えた女——貞婦・孝女と女工たち——」講師 大浜徹也 会費1回700円		赤坂公会堂	
	18:00~	「ミナマタ——講演と映画のつどい」(保育所つき)		札幌市教育文化会館	
27日(月)	18:30~	労働分科会〈行動する会〉		中島法律事務所	
30日(木)	10:00~12:30	「コンシャスネスレイジング——自分を変える方法」〈あごら東海〉		名古屋市婦人会館	052-331-5288
	18:30~	「あごらミニ20号、絵本の中の性差別」合評会〈あごら北海道〉		北海道クリスチャンセンター	
12月4日(日)	13:30~	ヤングレディ裁判		東京地方裁判所35部	
9日(土)	13:30~16:30	例会「女の自立と子どもの人権」婦人問題懇話会		代々木区民会館	
	13:00~16:30	第4回婦人問題講座・女性と福祉——人でも生きられるか「女の自立、生きがい、これからの福祉」〈国際婦人年北区の会〉(大阪)		北市民教養ルーム	06-371-1833
10日(日)	13:30~16:00	例会「婦人ホール問題について及び女性解放連絡会京都にどのようなかわるかについて」〈あごら京都〉		未定	
13日(水)	18:30~21:00	78第2期女大生「パネルディスカッション」〈アジアの女たちの会〉		渋谷勤労福祉会館	
15日(金)	19:00~21:00	連続講座「女と仕事——女の印刷会社奮戦記・女と見てくれ」森せつこ他〈ひかりぐるま&まいにち大工〉		すぺーすJORA	
16日(土)	13:30~16:00	女の生き方を考える婦人問題講座「女にとって子どもとは——現代の母親は」講師 藤井治枝〈中央区京橋図書館主催〉		中央区京橋図書館	03-543-9025
	14:00~16:00	婦人民主クラブ歴史講座「自我のめざめ——葉・晶子・らいてう——」講師 山本藤枝		赤坂公会堂	
	13:30~17:00	総括集会〈行動する会〉		東中野地域センター	
24日(日)	13:30~16:00	例会〈あごら京都〉		未定	

各地のあごら連絡先

あごら旭川	旭川市神楽岡一条五丁目3 田代慶子 ☎0166626511 6237 707811
あごら札幌	岩見沢市九条西三丁目 山口里子 ☎012622446772 7068
あごら北東京	川口市芝北町3413 宗久知恵子 ☎0482265113 0241 7332
あごら武蔵野	小平市小川町1-763 86 丹羽雅代 ☎042336749 7187
あごら京王	府中市晴見町3-21 関 和子 ☎04233624705 7183
あごら神奈川	神奈川県厚木市厚木8011 沼田千恵子 ☎04622216511 7243
あごら東海	名古屋市長区大高町伊賀殿107 高橋ますみ ☎05266224926 7459
あごら京都	京都市左京区北白川久保田町36-4 塚崎美和子 ☎075779144623 7606
あごら阪神	尼崎市武庫之荘3-6 木沢みすず ☎0643111022 7661
あごら九州	福岡市西区笹丘2-4 小島豊子 ☎092252176224 7810

〔編集後記〕へあごら東海へ編集の21号には、賛否両論が相次ぎました。「主婦に編纂のつとめを」という賛成論から「このように記事ののせるなんて、へあごらそのものに疑問を感じる」という否定論まで、各提点の持ち回り編集。各提点はそれぞれ、自立した、受け取り方もあるでしようが、それが「ミニ」の長所でもある部分かとも思います。今月はへあごら九州の担当、前号とはまた趣きが変わりましたが、活動報告もかねての問題提起、反論をお待ちしています。(C・K)